



# 「評価」からみた日本の高等教育の 現状と将来展望

大学の国際的魅力を生み出す評価とは？

東北大学

高等教育開発推進センター

准教授 米澤彰純



# 大学評価の性格(1): 主観と「客観」

- 誰が評価するか？
  - 多様な関係者 = 同僚の大学教員(ピア)、学生、政府、産業界、市民  
背景としての高度な専門性、他方での公共性・サービス事業としての性格
- 「客観」とは？
  - システム: 「第三者評価機関」 会計検査院的独立、しかし、実際の評価の担い手は、諸関係者から得るしかない。
  - 量的把握: ある程度以上の(論文や回答者など)の量があれば可能(分野による)。ただし、**いずれも関係者の主観的判断の量的な把握を超えないものが多い**。Ex. 引用度数。授業満足度。
  - 文脈の複雑さ: 量的指標の解釈は、必ずしも一方向ではなく、**主観に基づく「解釈」や「文脈の理解」が必要**。Ex: 外国人学生比率の高かった萩国際大学
  - 総合指標作成の困難: 諸指標を組み合わせたときの**ウェイト付けは、主観的判断**。その結果が社会から信頼されることで「客観」性を担保。これは、「客観」? 「通念」の再生産? あるいは、「権威の盲信」?

## 大学評価の性格(2): 研究・教育・社会貢献

- 研究: 質や量・インパクトは、(主観的といえども) 評価は実際広く行われている。
  - 方向性(知識の探求・創造、社会へのインパクトなど)は一般的合意が比較的容易。
  - よい研究、可能性のある研究への適切な資源の集中に対して、関係者を含めて一般的合意が得やすい。(分野間の調整、主義の違い、研究者の裾野の量的確保等は課題として残る。)また、**教育資金の確保へは配慮が必要**。
  - 指標化、量的把握の問題点など、方法論の研究・議論の蓄積がある。改善の余地や限界の指摘は、もちろんある。
  - 研究者は、採用・昇進・受賞などで、研究での評価自体には慣れている。
- 教育: 授業評価など徐々に進んでいるが、確立からはほど遠い。
  - 教員がまだ慣れていない、心理的抵抗感がある。
  - 研究大学や欧州など伝統がある大学ほど、研究と分離して考えるという発想が定着していないか、それ自体が疑問視される。
  - 学生の満足度調査: 重要だが、現役学生の主観だけでは、十分ではない。
  - アウトプット、アウトカムの定義が難しく、合意が得にくい(短期・中期・長期?)。また、インプットとしての学生の質・性格がそもそも違う。
  - 財政配分とのリンクについて、合意が得にくい。(対象・目的の多様性)

## 大学評価の性格(3): 国際性の確保

- グローバル化: 国境を越えた研究者や学生・サービスの移動の増加を背景に、研究・教育とも国際的評価をより重視する方向へ
  - ただし、世界大学ランキング (Times Higher Education Supplement、上海交通大学、ニューズウィークなど) は、いずれも発展途上。データの信頼性や作成意図などに、注意が必要。
- 実態としての評価: 特に教育評価は国内 (自国の言語) の文脈のなかで行われることが一般的。その上で、評価機関・団体や国のレベルでの国際ネットワークを通じた相互交流・認証などを模索。(UNESO/OECD, INQAAHE, APQN, JABEE+Washington Accord etc.)
  - 日本は、研究評価・教育評価とも、国レベルでは国内の文脈によるものが圧倒的多数。
  - 「国際」評価の試み
    - 東京大学物理学教室 (1991)
    - 「国際」アクレディテーション
      - JABEE: Washington Accordに加入。ただし、各大学の審査は日本語
      - AACSB: 慶應義塾大学、名古屋商科大学など。
    - 各大学が自主的に行う国際的なベンチマーキングなど (ソウル大学他。)

# 日本の高等教育の現状

- 2つの局面をもつ日本の高等教育の国際化
  - 日本・フランス・ドイツなど、**国内的文脈の国際的敷衍と国際的文脈の国内への導入**の両面が並立。  
(internationalization in two arena) : シンガポールやオランダほど「生命線」でなく、英米ほど受け身でもない。) グローバル化の中で、厳しい状況へ
    - 認識の遅れ。韓国ほど徹底せず、中国ほど国内的競争が厳しくない。さらに、アジアの急速な変化をとらえきれない。
    - 深刻な英語力不足 : 世界最低に近いTOEFL平均スコア
    - 労働市場の国内慣行が強く国際労働市場から孤立。
    - 底辺部分で、少子化による需要不足を背景とした国際化が進行(外国人学生比率が、国内での大学威信と不一致)

# 高等教育のポリティックスをどう国際・グローバルな文脈に転換できるか

大学・学術世界

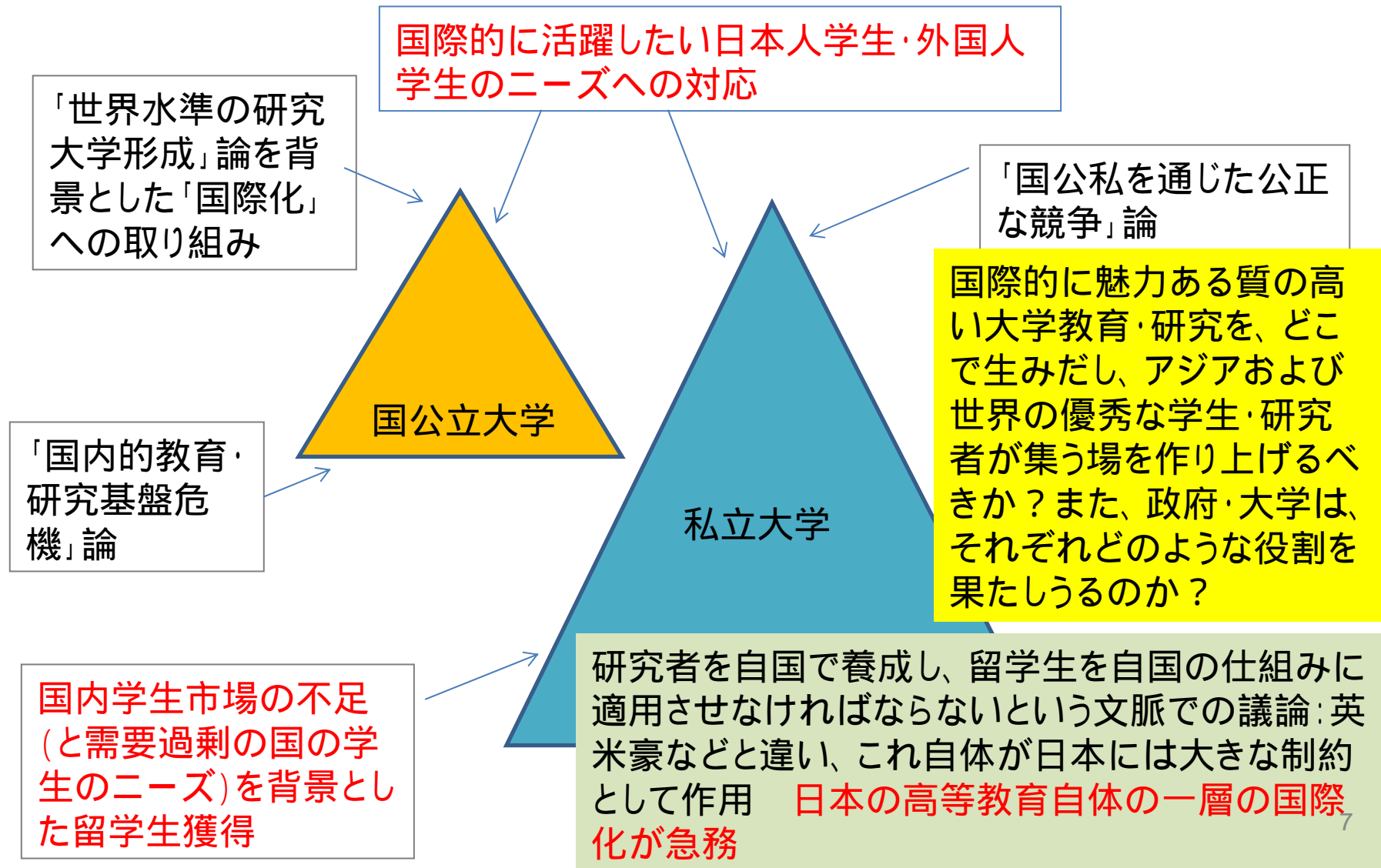
**国内的文脈**: 三者の力が調整しあうことで、学術の独立性・自立性、公共性、学生をはじめとするユーザーの便益のバランスのあり方が決定。= **評価のあり方もこのバランスのなかで議論する必要。**

**国際・グローバルな文脈**: 大学・政府・市場(時に地域も)が一体となって、自国の高等教育の魅力や威信を高めるよう協調していく必要。= **評価のあり方も、この文脈のなかで三者が協調して取り組む必要。**

政府

市場

# 国際的に魅力ある大学教育をどのように実現するか



# 大学の国際的魅力を生み出す評価とは？

- 「国際」ユーザーへの直接的な意見聴取の有効性
  - 外国人大学教員、留学生は、なぜ日本を選んでいるのか？どの点に満足し、魅力を感じ、どの点に問題を感じているのか？
  - 「世界水準での卓越(グローバルな魅力)」を保証する仕組みと「異文化への配慮(国際性)」を保証する仕組みの双方の重要性。国籍その他の属性に関わりなく、快適な環境で公正な競争的環境を実現できるルール作り 国際的に活躍したい日本人にとっても有効。
  - 外国人研究者(国際ピア)の積極的活用:国内関係者だけで「国際的魅力」を評価することには限界がある。
- 日本の大学情報・データの国際発信の促進の重要性
  - データの準備は、国際的な透明性と可視性を高める。
  - 外国から評価を受けるためには、必要な情報を利用できることが大前提。
  - 豊富なデータ・指標をもとにして分析することで初めて、何が有効な国際化を促進する指針・戦略となりうるかが明らかになる。(これ自体が現状では大きな課題)
- 大学の自主的なイニシアティブ・イノベーションとしての国際化への取り組みや評価を、国の長期的な戦略的視野をもって評価し、支援する必要: **グッドプラクティス型の評価を、具体的なデータに基づいて実施。**(「化かし合い」でなく、国・大学・市場が協力しあえる評価の環境作り)